

『三本の十字架』井上隆晶牧師

イザヤ 52 章 13 節～53 章 6 節、ルカによる福音書 23 章 32～43 節

①【キリストの苦しみの神秘】

ピラトはゴルゴダの丘に三本の十字架を立てました。イエス様を中心にして二人の犯罪人を、一人は右にもう一人は左に十字架につけました。そのとき、イエス様は父なる神に祈りました。「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのかわからないのです。」(24 節) 私がこの祈りを初めて聞いたのは、統一協会から逃げ帰って家の中に隠れていた時でした。この祈りを読んだ時「自分を殺す者を赦すこの方は本物だ」と思いました。そして神を裏切って逃げた私も赦されるかもしれないと勇気が与えられたのです。統一協会では、イエス様は救いに失敗したので十字架に架かると教えられましたが、私には失敗とは思えませんでした。議員たちはあざ笑い「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで選ばれた者なら、自分を救うがよい。」(35 節) といい、兵士たちも侮辱して「お前がユダヤ人の王なら、自分を救って見ろ。」(37 節) といい、犯罪人の一人も「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」(39 節) と罵りました。彼らはイエス様が多くの奇跡を行い、死者をよみがえらせたことを知っています。この言葉には罵りだけでなく、奇跡に対する期待と同時に、それを裏切られた怒りがまじっています。しかしイエス様は十字架から降りず、奇跡を行いません。もしキリストが十字架で苦しまなかったら、私たちの信仰はまったく異なるものになっていたでしょう。主の苦しみは自発的な苦しみでした。「誰も私から命を奪い取ることは出来ない。私は自分でそれを捨てる。」(ヨハネ 10 : 18) といわれたからです。主は自らの意志で十字架で苦しみ、自らの意志で死を選んだのです。古代の祈祷文はこう書いています。

●「大地を水の上に懸けられた者は、今日十字架の木に懸かり、天使たちの王は茨の冠をかぶせられ、雲をもって天を覆った者は、偽の紫の衣を着せられ、ヨルダン川でアダムを自由にした者は、頬を打たれることにまかせ、教会の花婿は釘をもって釘づけられ、処女の子は槍をもって刺されました。キリストよ、われらはあなたの苦しみにひれ伏します。」

使徒信条は「ポンティオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と「苦しむ」という言葉をあえて入れています。ユダヤ人たちは苦しみが無くなるのが救いだと思い、この世のカルト宗教はそろって苦しみからの解放を約束します。しかしキリスト教は苦しみからの解放を約束しません。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ 16 : 33) と主は言われました。苦しみは本来、神様がお造りになった世界にあってはならないものです。しかし人間の墮落と共に苦しみは入ってきました。苦しみはこの世では無く

なりません。墮落したこの世界では不可能です。そこで神様は人間を奇跡や力によって救うのではなく、苦しみを連帯するという方法で人を救おうとされたのです。「神は、…苦難の時、必ずそこにいまして助けてくださる。」(詩編 46:1)とあり、実際イエス様と一緒に苦しんでくださいました。苦しみがある時、イエス様に祈りましょう。神は共に負っていて下さいます。

②【右と左の強盗の運命は分かれてしまった。愛に気づくかどうか。】

犯罪人の一人はイエス様をののしりましたが、もう一人の犯罪人はこう言いました。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いをうけているのだから当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」(40~41 節)そして「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、私を思い出して下さい」(41~42 節)と言いました。その時、イエス様は「はっきり言うておくれ、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(43 節)といわれました。全ての人が苦しみます。その苦難の中に神は共にいて下さいますが、その苦しみの中で人は右と左に分かれてしまうのです。一方は自分の罪を認め、それでも愛して下さる神の愛を知り天国に入ります。もう一方は、同じ苦しみを受けても、神と人の愛を信じられず、苦しみを神と人のせいにして、恨みという地獄の中に閉じこもるのです。

私はなぜこの犯罪人は「あなたの御国においでになるときには、私を思い出して下さい」と言ったのか考えました。彼は「あなたの御国」といって、キリストの王国が存在することを信じ、その国の民になることを願いました。当時、ローマ帝国の市民権は多額のお金で買われていました。国が滅びれば、奴隷として売られ、家族はバラバラになります。お金と力がなければこの地上では生きていけないのです。一方、茨の冠をかぶったキリストという王は、この世の王と何と違うことでしょうか。愛と赦しに溢れた王です。そして犯罪者でも、どんな人でも望めば無償でその王国の民にしてくださいます。昔のクリスチャンたちは「キリストの王国」をものすごく慕いました。十字架を見つめていると、この王の僕で良かったとつくづく思います。

●「慈愛そのものである神の御目からご覧になれば、どんな人間であるか、とかどんな人間だったかなど問題ではなく、どんな人間になりたいと願っているかという人間の願望だけが評価されるのです。」『不可知の雲』から引用

③【神の愛に負けなさい、肩の力を抜きなさい】『不可知の雲』から引用

私はこの犯罪者を変えたのは、キリストの純粋な愛だと思います。

●カリストス・ウエア主教はこう書いています。「何が成し遂げられたのか。受難する愛の勝利、愛の憎しみへの勝利に他ならない。キリストは自分の者たちを極限まで愛し抜いた。愛ゆえに世界を創造し、愛ゆえに人としてこの世界に生まれ、愛ゆえに私たちの損なわれた人間性をご自身のものとして担った。愛ゆえに私た

ちの苦難を分かち合った。愛ゆえにご自身を犠牲としてささげ、ゲッセマネの園で進んで苦難を受けることを決意した。…十字架の時、闇の力はイエスを攻撃して荒れ狂う。しかしそれはイエスの被造物への憐れみを憎しみに変えることは出来ない。愛はそんな妨害をはねのけて愛そのものであり続ける。主の愛は最も困難な地点で試みられるが、打ち倒されない。『光は闇の中に輝いている、そして闇はこれに勝たなかった。』

「キリストは愛そのものであり続ける」。何とすばらしい、美しい言葉でしょう。この世が何をしてもイエス様の人間への愛は変わりませんでした。彼からは善しか出て来ないので。神は愛だからです。神は神であり続け、今もいつも世々に愛そのものであり続けます。右の犯罪人は、このキリストの愛に負けたのです。そしてこのキリストの愛に賭けよう、愛されるままになろうと肩の力を抜いたのだと思います。それが「あなたの御国においてになるときは、私を思い出して下さい」という言葉だったのだと思います。ある実話をお聞きください。

●ある司祭でもある医師の所に 15 歳の少女がやってきて机の上にある福音書を見てこう言いました。「教育豊かなはずの人が、こういうのに書いてある馬鹿げたことをどうして信じるんですか？」その後、彼女は聖書を読んで興味が湧き、生き方がすっかり変わりました。やがて彼女は不治の病に罹るのですが、一通の手紙が届き「私の体は衰え始め駄目になって来ておりますが、心は今までのどんな時よりも生き生きとしていて、喜びをもって神の存在をとても感じるようになっていきます。」と書いてありました。しばらくして再び手紙が来て「今はひどく衰弱してまいりまして、神に向かおうとする努力もできなければ、神を求めることも出来ません。神は去ってしまわれました。」と書かれていました。その後、死の病に嫌気がさした夫は彼女を見捨てました。しばらくして彼女から手紙が来ました。「私は完全に敗北しました。神に向かうことはとてもできません。でも、神の方が私に向かって降りて来てくださいます。」

私たちの善を行う力が底をついても大丈夫なのです。この犯罪者もそうでした。もう何も出来ません。正しいことが何一つ出来なくても、キリストは私を迎えに降りて来てくださるでしょう。キリストはこの犯罪者を腕に抱き、樂園に連れて行ってくれるでしょう。聖パウロが言ったように「神の力は弱さの中でこそ十分に発揮される」(Ⅱコリント 12 : 9) のです。私たちはキリストの愛を誇りましょう。貧しく、罪深い私たちを愛して下さる神に栄光と賛美を献げましょう。